

機動部隊旗艦「大和」 6

「大和」 残照

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明

地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたっふ

目次

第一章 前進基地マリアナ

第二章 凶鳥フツケバインの空

第三章 硫黄島の砲煙

第四章 老雄ほうこう咆哮

第五章 鋼鉄の黄昏たそがれ

第六章 和平への飛翔

終章

あとがき

216 209 199 137 89 59 31 9

西太平洋要図

160°E

170°E

40°N

太平洋

30°N

20°N

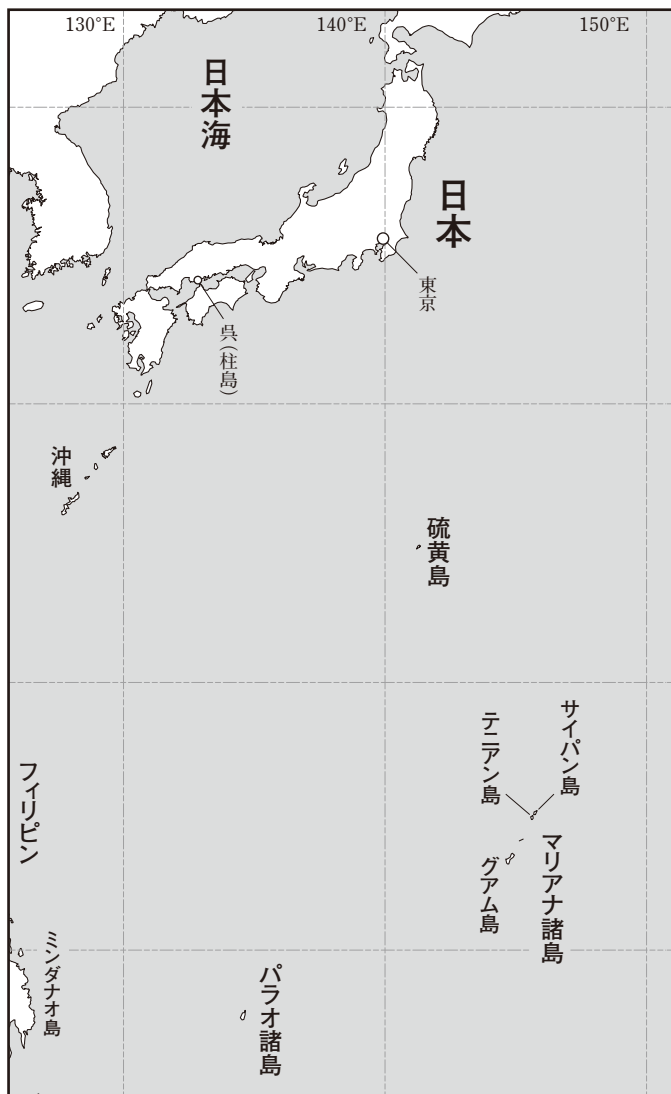
ウ
エ
ー
キ
島

10°N

メ
ジ
ユ
ロ
環
礁

ク
エ
ゼ
リ
ン
環
礁

ト
ラ
ッ
ク
環
礁



硫黄島詳細図





機動部隊旗艦「大和」 6

「大和」 残照

第一章 前進基地マリアナ

1

前を行く指揮官機の後席に、オルジス信号灯の光が点滅した。

「針路一二〇度。高度〇一（二〇〇メートル）」

第七五二航空隊の二番機で機長と偵察員を務める清村剛少尉は、操縦員の佐野哲平上等飛行兵曹に指示した。

飛行隊長笠井信康少佐の機体は、左に旋回しつつ高度を下げている。

清村機も笠井機に倣い、左に大きく旋回する。

硫黄島の第一飛行場から発進し、サイパン島を目指して南下して来た攻撃隊三六機は、月齢一五の月を前方に見上げつつ、海面付近まで降りてゆく。

七五二空の装備機は、新型の双発陸上爆撃機「銀河」だ。

爆撃手席は視界が広い機首にあるため、海面がせ

り上がるように感じられる。

海面に突っ込もうとしているような錯覚に囚われるが、一式陸上攻撃機搭乗時から組んでいるベテラン下士官の腕は確かだ。

速度性能の高い銀河を手足のように操り、高度一〇〇メートルで水平飛行に移る。

清村は、航法のチャートに目を落とした。

現在位置は、サイパン島よりの方位三〇〇度、一〇〇埋だ。

米軍がサイパン、テニアン、グアムの周囲に張り巡らした電波の監視網を逃れるためには、マリアナ諸島を西か東に迂回し、かつ海面すれすれの低空から島に接近するのが有効だ。

（サイパンを攻撃することになるとは）

機体の振動に身を任せながら、清村は嘆息した。

七五二空は、昨年二月のトラック沖航空戦で第七五三航空隊と共に、敵機動部隊への雷爆撃を敢行し、空母一隻、駆逐艦二隻撃沈、空母二隻、戦艦、重

巡各二隻撃破の大戦果を上げた部隊だ。

昨年一月には、七五三空と共にマリアナ沖海戦に参加したが、六割以上の機体と搭乗員を損耗し、事実上戦力を喪失した。

生き残った隊員は、サイパン、テナアンで飛行場の守備に当たっていたが、米軍が上陸して来る前に、飛行艇と潜水艦によって内地に脱出し、「銀河」の装備部隊として再編成されたのだ。

昨年半ばまで、最前線に向かうための中継基地だったサイパン島が、今は米軍の前線基地となり、日本本土を脅かしている。

日本軍は、硫黄島からサイパンに長距離爆撃を繰り返したが、敵飛行場の完成を遅らせることはできても、阻止には至っていないのが現状だ。

本土上空が多数の敵重爆撃機に覆われる日は、いずれやって来る。

その日を、一日でも遅らせるのが、基地航空隊の使命だった。

「八〇哩」

「七〇哩」

清村は航法のチャートを記録しながら、佐野にサイパンとの距離を伝える。

「左正横、艦影！」

サイパンまでの距離が五〇哩を切ったとき、電信員宮田英吉一等飛行兵曹が叫んだ。

清村は「敵艦見ユ。左正横」と、指揮官機に発光信号を送った。

おそらく、哨戒中の駆潜艇や掃海艇だ。攻撃隊は、敵に発見されたのだ。

「二四〇ノット（時速四四四キロ）二増速」

との信号が返された。

海面付近における銀河の最高速度に近い。

笠井隊長は、一気にサイパンとの距離を詰め、敵が夜間戦闘機を発進させる前に叩くつもりであろう。

「速力二四〇ノット」

「二四〇ノット。宜候」

佐野の復唱ふくしょうと共に、偵察員席の左右で爆音が高まり、清村機が加速される。

この直前まで、巡航速度で飛行していた三六機の銀河は、なだれ込むような勢いで、サイパン島へと突進する。

指揮官機の向こうに、稜線りょうせんがぼんやりと浮かび上がる。

「正面にサイパン島」

清村が佐野に伝えた直後、

「味方機、一機被弾！」

宮田が叫び声を上げた。

「もう来やがったか！」

清村は罵声ばせいを漏らした。

敵の夜間戦闘機が、攻撃隊の後方から食らいついて来たのだ。

米軍は既に夜間戦闘機を発進させ、戦闘空中哨戒に当たらせていたのかもしれない。

「指揮官機より受信。『無線封止解除ふうし。二番機、前

へ』

「全速だ、佐野。攻撃隊の先頭に立て！」

宮田の報告を受け、清村は佐野に命じた。

清村機は、吊光弾ちやうこうだんの投下を担当する。

爆撃の成否せいひを左右する重大な役目だが、攻撃隊は既に敵の夜戦に取り付かれている。

吊光弾を首尾しゅび良く投下できるのか分からないが、今は命令に従い、先頭に立つ以外にない。

清村機が、更に速度を上げた。

指揮官機を追い抜き、攻撃隊の先頭に立った。

「味方機、また一機被弾！」

宮田が、悲痛な声で報告を上げる。

（少しばかり足が速くなったぐらいでは駄目だめか）

清村は唇くちびるを噛み締めた。

銀河は、零戦に匹敵ひつてきする速度性能と、一式陸攻と同等の航続性能、爆弾搭載量を持つ高速爆撃機として開発された機体だ。

搭乗員を、一式陸攻の八名から艦攻並の三名にま

で減らし、機体を軽量化して、最大時速五四六キロの速度性能を確保した。

開戦時における米軍の主力艦戦グラマンF4F「ワイルドキャット」なら、振り切れたかもしれない。

だが、F4Fの後継機となったグラマンF6F「ヘルキャット」や双発双胴そうどうの高速重戦闘機ロッキードP38「ライトニング」から逃げ延びるのは難しい。

速度性能を多少高めたところで、爆撃機は爆撃機だ。戦闘機の護衛なしでは、敵の迎撃げいげきを突破するのは至難だ。

それでも、今は行くしかない。

清村機が機首を上げ、上昇に転じた。

高度を上げれば、敵の夜戦に捕捉される可能性が高くなるが、吊光弾は、ある程度の高さから投下しなければ効果がない。

(来るなら来い)

清村は機首の二式一三ミリ旋回機銃に手をかけ、敵の夜戦に呼びかけた。

前方の月が、不意に翳かげった。

清村機は右旋回に転じた。

機首の左脇を青白い曳痕えいこんが通過した直後、黒い巨大な影が通過した。敵機が巻き起こした風に煽あおられ、銀河が僅わずかかによろめいた。

爆撃機である銀河よりも、敵戦闘機の方が大きく、重いように感じられた。

「後家ごけか！」

清村は敵機の正体を見抜き、渾名あだなを口にした。ノースロップP61「ブラックウイドウ」。「黒後家蜘蛛ぐも」の機名を持つ、双発双胴の夜間戦闘機。

過去にも日本軍の夜間攻撃を迎え撃ち、一式陸攻や銀河を何機も墜おとした機体だ。

「敵機、左後方！」

宮田が叫び、清村機が左に旋回する。青白い火箭かせんが機体の右脇を通過する。

敵機が追い抜きざまに、一連射を浴びせる。

P 61が胴体上面に装備する旋回銃塔が、一二・七ミリ弾を発射したのだ。戦闘機というより、空飛ぶ軍艦とも呼ぶべき機体だ。

「佐野、宮田、無事か?」

「二人とも無事です!」

清村の問いに、即座に応答が返される。

清村は、前方に目を凝らす。

「電探などに負けるか。こつちには、親から貰った立派な目があるんだ!」

吐き捨てるように、清村は呟いた。

左前方の星明かりが遮られた。

「佐野、左だ!」

清村は叫ぶと同時に、発射把柄を握った。

一二ミリ機銃の銃口から赤い曳痕がほとぼしり、銃把が両手の中で躍った。

ほとんど同時に、左前方に発射炎が閃き、青白い火箭が噴き延びた。

一瞬、月明かりや星々が敵の機影に遮られる。敵機が頭上を通過し、後方に抜けたのだ。

清村は、下方を見た。

海岸に打ち寄せる波飛沫が、微かに見える。機体は、サイパン島の南岸上空に達したのだ。

「吊光弾を投下する。このまま直進!」

清村は、佐野に指示を送った。

高度計の針は、五〇〇メートルを指している。吊光弾の投下高度としては低めだが、これ以上上昇する余裕はない。

「このまま直進。宜候!」

佐野が復唱を返した。

清村は機銃の把手から手を離し、ボーコー照準器を覗き込む。月明かりの下に、サイパン島の南岸がぼんやりと浮かび上がる。

手前から前方に向けて伸びる、灰色の直線が二本、清村の視界に入った。

「ようーい、てっ!」

清村が気合いと共に投下レバーを引いたとき、

「後方より敵機！」

宮田の叫び声が伝わった。

一拍遅れて、衝撃が清村機を襲った。

ハンマーで連打するような衝撃音が機首に伝わり、機体が熱病の発作のように震えた。左の一番エンジンが火を噴き、黒煙が後方になびき始めた。

高度を下げ始めた清村機の左方を、P 61が爆音を立てて通過した。

「佐野！ 宮田！」

清村は二人の部下を呼ぶが、応答はない。P 61の射弾は、コクピットを襲ったのかもしれない。

清村は風防ガラスに顔を押して、機体の後方を見ようとした。

生還が望めないのは分かっているが、せめて吊光弾の投下が成功したかどうかを知りたかった。

その思いに込めるかのように、機体の後方に複数の光源が出現し、風に吹かれて漂い始めた。

「よし！」

清村が満足感を覚えたとき、生涯で初めて経験する凄まじい衝撃が襲って来た。

「二番滑走路への命中弾三。いずれも一〇〇〇ポンド相当。修復には、二日を要する見込み。他、敵一機が一番滑走路上に墜落。現在、撤去作業中」

第二二爆撃軍司令部に、報告が上げられた。

21 B Cは、サイパン、テナアン、グアムのマリアナ三島に展開する戦略爆撃機を統括する部隊だ。

司令部は、イスレイ飛行場と名を変えた、かつてのアスリート飛行場を望む場所に置かれ、司令官室からは滑走路を遠望できる。

三〇分ほど前までは、硫黄島から来襲した日本機と迎撃に上がったP 61の爆音が上空に轟いていたが、戦闘は既に終了し、敵弾の炸裂によって生じた火災も消し止められていた。

「無蓋掩体壕のB17に被害は？」

「弾片による損傷機があり、現在被害状況を調べています」

司令官ヘイウッド・ハンセル准将の問いに、作戦参謀のジョセフ・マクレディ中佐が答えた。

「戦果は？」

「銀河一四機を撃墜したとの報告が届いています。」

来襲した敵機は、三〇機から四〇機の間と推定されますので、三分の一を墜とした計算になります」

「一四機と引き換えに、滑走路とB17を若干傷つけただけです。ジャップも、割に合わない攻撃をしたのですな」

嘲るような口調で言った参謀長のハリー・パターソン大佐に、ハンセルは応えた。

「彼らも死に物狂いなのだろう」

合衆国軍がサイパン島に上陸したのは昨年一一月一八日。完全占領を宣言したのは、今年の一月二三日だ。

日本軍は頑強に抵抗したが、制空権、制海権を

失った状態では限界があり、二ヶ月で力尽きたのだ。

テニアンは一月二〇日に、グアムは二月四日に、それぞれ陥落している。

サイパン、テニアン、グアムとも、内陸部にはまだ日本兵が残存しており、散発的な攻撃をかけて来るが、彼らに島を奪い返す力はなかった。

陸軍戦略航空軍のマリアナ進出は、サイパンの陥落よりも早く、一月二七日に第一歩を記している。

マリアナ三島の飛行場建設は、海兵隊による日本軍の掃討と並行して進められ、三月初めにはサイパン、テニアンで各二箇所、グアムで三箇所の飛行場が稼働を始めた。

統合参謀本部は当初、マリアナ三島に新型戦略爆撃機ボーイングB29 スーパーフォートレスを進出させる計画を進めていた。

B29であれば、マリアナ諸島から直接日本本土の大部分を叩くことができる。

日本の国力の根幹を破壊し、戦争遂行の能力を奪うと共に、日本軍がいかに無力であるかを、直接日本国民に教えてやるのだ。

ハンセル自身も、従来の四発重爆撃機よりも遙かに高性能な新型機の到着を心待ちにしていた。

ところがこの計画は、ヨーロッパの戦局により、大幅な修正を余儀なくされた。

イギリス本土に展開する合衆国第八航空軍——ボーイングB 17 ッフライング・フォートレス——とコンソリデテッドB 24 ッリベレーターで編成された重爆撃機部隊が大きな損害を受け、ドイツ本土に対する戦略爆撃の継続が困難になったのだ。

ドイツ空軍は、ハインケルHe 280、メッサーシュミットMe 262、ハインケルHe 219 ッウーフ——といった、強力な戦闘機を多数前線に投入し、連合軍の爆撃機を片端から撃墜した。

連合軍の重爆撃機はドイツ本土の国境周辺を攻撃するだけで精一杯であり、帝都ベルリン、ルールの

工業地帯、内陸部の主要都市等の重要拠点には、手を出せない有様だったのだ。

合衆国の統合参謀本部はこの状況を打開するため、B 29のヨーロッパ戦線投入を決定した。

マリアナ諸島から日本本土を叩くため、準備していたB 29の装備部隊は、全てイギリス本土に展開し、ドイツ本土を攻撃することになったのだ。

その代わり、日本本土に対する戦略爆撃には、B 17、B 24が用いられることになった。

日本の防空態勢は、ドイツほど強力ではなく、高性能なジェット戦闘機や夜間戦闘機もない。

ドイツには通用しなくなったB 17、B 24も、日本になら通用するというのが、統合参謀本部と陸軍戦略航空軍司令部の判断だったのだ。

ただし、B 17、B 24には、マリアナ諸島から直接日本本土を叩けるだけの航続性能はない。

日本本土、特に首都東京を攻撃するには、硫黄島を攻略し、重爆撃機を運用できる飛行場を建設す

る必要があるのだ。

このため、統合参謀本部は次の攻略目標を硫黄島に定め、準備を進めている。

日本軍も、合衆国軍の次の攻略目標を察しているだろう。

彼らはそれを阻止すべく、硫黄島からマリアナまでの長距離爆撃を、繰り返しかけているのだ。

「本土空襲を恐れるなら、さっさと白旗を上げればいいものを。自分たちが置かれている状況を、彼らが理解できないとは思えないのですが」

パターン参謀長が首を傾げた。

合衆国海軍は、昨年一月五日から六日にかけて行われたフィリピン海海戦（マリアナ沖海戦の米側公称）で、日本海軍の連合艦隊に壊滅的な損害を与えた。

空母六隻を撃沈、艦上機約四〇〇機を撃墜し、近代海軍に不可欠の航空戦力を奪い去ったのだ。

日本は、今なお合衆国領フィリピン、イギリス領

マレー半島、ビルマ、オランダ領東インドなどを確保しているが、それらを守るだけの戦力を持たない。彼らがどのようにあがこうと、戦局の逆転は不可能だ。

日本の為政者や軍部は、それを理解できぬのだろうか、と言いたげだった。

「よりよい——というより、少しでも宥和的な講和条件を狙っているのかもしれない」

ハンセルは言った。

合衆国軍が大きな打撃を受け、作戦のスケジュールが遅れるようなことがあれば、本国政府も日本に対し、講和のための条件を緩めるかもしれない。

彼らはその道を探っているのではないか、とハンセルは推測していた。

「硫黄島の敵航空部隊に対しては、いかがいたしますか？ 第三八九爆撃群と第四四五爆撃群であれば、出撃が可能です」

「そうだな」

マクレディ作戦参謀の問いに、ハンセルはすぐには答えず、しばし思案を巡らした。

21BC 隷下の重爆撃機は、戦略爆撃が任務だ。戦術目的に使用し、機体やクルーを消耗したくはない。

だが、マリアナを一方的に叩かれるというのも癪な話だ。

「イオウジマのジャップを黙らせるか。少数機の夜間爆撃程度で我が軍の飛行場が壊滅することはないが、やられっ放しでいることもないからな」

2

硫黄島に最初の空襲警報が鳴り響いたのは、三月三〇日の一三時過ぎだった。

「海軍より情報。一三時九分、敵大型機の編隊、硫黄島の南一五〇キロ地点を北上中」

島の北部に設けられた司令部壕に報告が届けられるや、

「総員、洞窟陣地に退避！」

小笠原兵団長兼第一〇九師団長栗林忠道中将は、麾下の全将兵に下令した。

硫黄島の守備に当たる小笠原兵団は、第一〇九師団の他、混成第二旅団、戦車第二六連隊、歩兵第一四五連隊等、総勢約一万五五〇〇名の兵力を有する。他に、第三航空艦隊から派遣された第二五二航空隊、第二七航空戦隊隷下の南方諸島航空隊、硫黄島警備隊等、約七五〇〇名の海軍部隊をも指揮下に置いている。

栗林は、地下陣地を利用した持久戦によって米軍を迎え撃つとの方針に基づき、深さ約一〇メートル、場所によっては二〇メートルに達する地下道を島内に張り巡らし、多数の火器を巧みに配置して、強固な防御態勢を敷いた。

硫黄島、マリアナ諸島間の航空戦は、海軍航空隊による長距離爆撃を中心に推移しており、硫黄島に対する本格的な空襲はなかったが、三月中旬より、

しばしば米軍の偵察機が硫黄島上空に飛来した。

栗林も、各旅団や連隊、海軍部隊の指揮官も、

「敵の来寇近し」

と睨^{にら}んでいた。

果たして米軍は、硫黄島への攻撃を開始したのだ。

島内各所で、洞窟陣地の拡張や砲陣地、機関銃陣地の強化に当たっていた将兵は、一斉に動き出した。

陣地の構築と合わせて、地下陣地への退避訓練も入念に積んでいたため、混乱はほとんどない。

全員が最寄りの地下陣地に駆け込み、奥に身を潜^{ひそ}める。

地下陣地内には熱がこもり、場所によっては四〇度を超える。火山性ガスも漂い、防毒面が不可欠だ。

陣地にこもるだけでも相当な難事^{なんじ}だが、将兵は黙って耐えた。

「我々がこの島に来たのは、砲爆撃に吹き飛ばされるためではない。上陸して来る敵を撃滅^{げきめつ}し、本土を守るためだ」

栗林はするように訓示し、各部隊の指揮官も、部下に繰り返し言い聞かせていた。

島の中央に設けられた元山飛行場^{もとやま}では、第二五二航空隊の零戦が出撃を開始している。

飛行長が旗を振るや、零戦はフル・スロットルの爆音を轟かせ、土煙^{つちけむり}を巻き上げながら、一機、また一機と飛び立つてゆく。

硫黄島南部の千鳥飛行場^{ちどり}からは、サイパン攻撃から帰還した陸上爆撃機「銀河」が、空中への避退^{ひたい}を開始する。

P 61の熾烈^{しれつ}な迎撃や、濃密な対空砲火をくぐり抜けて生還した機体が、次々と空中に舞い上がり、島から遠ざかっている。

元山、千鳥の両飛行場、及び島の北部に設けられた北飛行場では、一二センチ高角砲、七・六センチ高角砲が大仰角^{ぎょうかく}をかけ、天を睨む。

空母や巡洋艦^{じゅんようかん}の対空火器を新型に換装したとき、降ろされた高角砲が、飛行場の対空火器に転用され

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。